

# 吉田さんと池田さん

外交調査会長代理時代の昭和四十一年十月十四日に発行の『春風秋雨』の前編「池田政権の座標」の第九章。吉田茂さんの魅力を語る

## 1 大磯

池田さんは静養先の箱根への行き帰り、よく大磯に吉田元総理を訪ねることを楽しみにしておられた。

行き帰り枝折戸を見て思うかな

しばし相見ぬあるじいかにと

は天皇陛下の吉田さんを偲ばれた御感懐であるが、吉田さんは、大磯の海岸で悠々自適の境涯にはいつておられる。

しかしこの閑居は、決してお粗末なものではない。北に小山を背負い、南は縹渺たる太平洋を抱えた豪壮な屋敷である。つい隣まで故堤康次郎氏の所有地になってきたので、いつの日かこの屋敷も堤さんのものになりはしまいかと心配するむき（例えば高橋達之助氏）もあつたよつであるが、逆に吉田さんは、その堤さん所有にかかる五賢堂さえも移転費付きでもらいうけ、自分の屋敷に移してしまわれた。

五賢堂というのは維新の元勳伊藤博文、木戸孝允、岩倉具視、三条実美、西園寺公望の五賢人を祭つた小宇である。

わが国には海外から多くの賓客が訪れる。そして、その数は年を追つて多くなつてくる傾向が見られる。吉田さんは、その方々を必ずといっていいくらいにこのお屋敷に招待される。米国はもとより英独仏さらには中国といった具合に、吉田さんの客となられた要人は多い。吉田さんの客に対する応対ぶりは、その人柄が偲ばれて、全くユニークなものがある。天衣無縫というか慇懃無礼というか、聞く人を唾然たらしめるに足るものであるが、聞く人にとつて一種の快い響きをもっている。この人の毒舌を楽しむ人も多い。これは、相対の世界から超絶した高い立場に立つ吉田さんによつてはじめて可能なことであるといえよう。

## 2 吉田さんの魅力

総理その他の要人の大磯訪問ということになると、世間では、それが何か政局に特別の影響や意味をもっているかのように取沙汰されるのが通例である。吉田さんという方は、政局を担当されていようがいまいが、代議士というパツジをつけられていようがいまいが、絶えずそのように問題になる人である。しかし私は、それら要人の大磯訪問を格別に意味があるものとは思っていない。恐らく訪問を受

けられる吉田さん御自身も、何とも思われていないのではないかと思う。池田さんの大磯訪問も、先輩であり恩人である吉田さんに対する礼儀ということが先に立ち、吉田さんとのたわいもない会話ににじみ出る人間的魅力にひきつけられてのことであつたと私には思われる。何となれば、池田さんは吉田さんを師表と仰ぎ、かけがえのない恩人として敬慕しておられるが、同時に吉田さんが現実の政局の裸面においてこられることを好まれず、またそういうことのないように終始ごまかく配慮されておつたからである。

そのように吉田さんを迎えることが、吉田さんを敬慕する後輩としての礼儀であり、日本の政治から院政的臭味をとり除く道であると池田さんは考えておられたようだ。日本の政界で吉田さんほど高い水位に立しておられる人はなく、国民の心の奥に吉田さんほど深い敬意と信頼をかち得ている人はない。それだけにこの偉人が超然たる絶対の立場におられることが、日本の政界全体のために必要なことだと池田さんは心得ておられたようだ。現実の政局の平面上に吉田さんがおられてこられるとなると、吉田さんは、否応なしに派閥という相對の世界に何等かの立場をとられるもの、と見られる破目になられる。それはよいことではない。代議士を引退されて、非公公式ながら、宮中のことに

いてだけ、御相談にのつていただきたいと吉田さんに懇請されたのも、他ならぬ池田さんであつた。

ところがこの池田さんの微衷を、当の吉田さんがどのように受けられているか、それは私にもよく判らない。なるほど吉田さんは池田さんの懇請を容れて、昭和三十八年の総選挙には立候補を断念された。また私などがお訪ねしても、現実の外交政策や外務省の人事に対し、自らの注文を出されるようなことは一切されなくなった。私なども冗談まじりに「あまり長居をすると外務省の人事などについて御注文がでると困りますから、この辺でお暇乞いをすることにいたします」と申上げると、吉田さんは何々大笑されるのが常であつた。吉田さんはよほど自制されているにちがいないと思われる。

しかしそれでは吉田さんは一切の俗事に超然としておられるかという点、必ずしもそうではない。天下の大事についてははもとよりであるが、友人知己から頼まれた些事についても、それを机の引出しにしまつておかれるようなことはなされない。自ら筆を執られて、池田さんはじめ要路の人々には、自分の所見や希望をよく書いて寄越されたばかりでなく、自ら電話機をとつて電話されることもまれではなかつた。池田さんは「オジイサンからこつという書翰がと

どいたよ」とか「オジイサンはこういわれておるよ」といふことをよく洩らされたものである。池田さんによこされた吉田書翰は、大きいトランクの空間を満たすほどになつておるにちがいない。一体このことはどう解釈すべきものであろうか。

吉田さんという人は、義理と友情に篤い方である。かつて自分が指導を受け恩義をこうむつた先輩や友人に対してはもとより、その子女や孫のことまでも、常に案じておられる恩誼に篤い人である。また人から依頼されたことについては、細大となく、然るべき処理をされないと気がすまない律義な人でもある。そしてその心情が特定のことに触発されては書翰ともなり、電話ともなつてくるとしか思われない。それを受けた相手方がどのように受取るか、というような配慮や遠慮はされない。相手もまた自分と同様に恩に感じ義に篤い人として考えられておられるにちがいない。相手もまた自分と同様に、ハッキリと物事を割り切つて、是は是、否は否、好は好、嫌は嫌であると思つておられるのであろう。清明をもつて心を支え、淡々をもつて情を抑え、勇断をもつて事に処す方である。「こういふ事については池田君が迷惑がるにちがいない」なぞという心遣いは、自分の第一義とする義と理の前には別して気にか

ておられない方ではあるまいか。

ただ、池田さんはさきに述べたような配慮から、自分で進んで現実の政局の問題を吉田さんにもちかけるようなことのないよう終始心掛けておられたことは間違いない。また世にいう大磯会談というものが、政局問題にふれたこみ入つたものであつたという評価も成り立たないと私は判断しておる。

吉田茂という大器を論評することがここにおける私の主題でもないし、私はその任でもない。ただ吉田、池田両氏の交渉というものを最近の政局問題に限つてみれば、私はこのように理解しておるといふことだけを述べるに止めておきたい。吉田茂の人物と業績を探究することは、日本の近代政治史にとっての大きい課題であるからだ。